

メディチ家の芸術政策に反対して、ドメニコ僧のサヴォナローラが、宗教政治を行なったことはよく知られている。メディチを追放し「退廃芸術」作品を燃やしたりしたが、その統治は数年しか続かなかった。彼自身火刑に処せられたのである。その間、ミケランジェロもまたボローニャ、ローマに逃げながらも、作品を制作していた。彼自身、宗教を否定したわけではない。ただその非芸術性に耐えられなかったのである。その後、フィレンツェに帰還するとダヴィデ像を作り、レオナルド・ダ・ヴィンチと共に市の公会堂でカッシーナの戦いの図を描いた（未完成に終わったが）。彼はこの頃から詩を作り始める

フィレンツェが芸術都市と言われるのは、芸術家たちが、決して政治を忌避したからではない。まさに政治そのものの格闘することによって芸術を創造したといつてよい。ミケランジェロはその後、ローマに行き、ユリウス二世のためにシスティナ礼拝堂の天井画を描く。メディチ復歸後のフィレンツェで礼拝堂の彫刻を制作する。その生涯はまさにその政治とともに存在した。近代のように「公」を避けて「私」に閉じこもろうとしたわけではなかった。「公」も「私」も共に、彼らの芸術の主題であったのである。

ダンテ、ジョット、マサッチオ、ドナテルロ、ポッティチェルリ、そしてレオナルド、ラファエルロ、次々の生まれるフィレンツェの芸術家たちは、まさに「公」と「私」のダイナミックな格闘の中に生きた。それこそ創造性の秘密であったのだ。